



花火は平和の象徴

冴木 一馬 Saeki Kazuma

私は、24歳のときに脱サラをして報道カメラマンになりました。周りの友人も含め、報道カメラマンをしている人たちは、少なからず自分なりの正義感をもっています。私も先輩達の仕事ぶりを見て、少しでも世の中のためと思う気持ちで毎日駆け回っていました。韓国の民主化問題、フィリピンのアキノ政変など、国内だけにとらわれず海外も見てきたつもりです。韓国では迫力ある写真を撮ろうと、ヘルメットを被り、ガスマスクを装着して学生と軍隊の間に入り、銃撃を受けたこともありました。一発の銃弾は私のカメラバッグを貫通し、私は間一髪命拾いをしました。

しかし、どれだけ頑張っても自分の理想には近づかず、悩んでいるときに会ったのが花火でした。きっかけは大阪の「天神祭」。主催者からの依頼で、花火大会の記録の仕事でした。このとき、生まれて初めて花火の撮影をしました。大きな「ドーン」という音に煌びやかな光のシャワー。私は一瞬にして心を奪われました。初恋のような心持ちでした。思い悩んでいた気持ちに「何か新しい光みたいなものを与えてもらった」。そんな感じがしました。私はいつの間にか、報道カメラマンから花火写真家になり、そして1997年には花火師の資格も取得し、「ハナビスト」と名乗るようになりました。

「ハナビスト」という言葉は私が作った造語で、辞書には載っていません。当時は横文字職業が華やかなときで、何かいい肩書きがないかと考えていたときに思いついたものです。普段は世界中の花火を写真や動画に記録しながら、火薬を含めた歴史や文化の研究をしています。

現在、国連加盟国は193カ国ありますが、花火はそのうちの約30カ国にしか存在しません。また

私たち素人が楽しむ線香花火のような「おもちゃ花火」(玩具花火)は、その半分の約15カ国にしかありません。何故なら、多くの西欧の国々では古くから宗教や人種の違いによる紛争が続き、たとえ「おもちゃ花火」といえども、一般の人々には火薬を扱わせないという文化が色濃く残っているのです。これはハナビストになって海外の火薬や花火の歴史を研究した上でわかったことです。まさに花火は「平和の象徴」であり、私たち日本人は子どもの頃から何の疑問もなく自由に花火を楽しんできた平和な国の人たちなのです。近年も世界中で様々な紛争が続いていますが、私は花火を通して、報道カメラマン時代には成しえなかった「人間の幸福とは何か」を皆さんにお伝えできればと考えております。

また、「ハナビスト」というこの職業も、世界中で1人しかおりません。花火や火薬に関する科学的な研究者は世界中にいますが、私のような民俗学的な研究者には、今までに会ったこともありません。1人でも前任者がいれば、その人の生き方を参考にできますが、私の場合は全くいないので、常に仕事と生き方を模索しながら毎日を過ごしています。これまで培ったことは、「決して諦めないで続けること」。まさに、継続は力なり。こうやって皆さんに私の思いを伝えられるのも、諦めないで続けてきたお蔭といえましょう。

さえき かずま

山形県生まれ。ハナビスト。報道カメラマンを経て、1987年から花火の撮影を始める。1997年に花火師(煙火打揚従事者)の資格を取得。世界各地の花火を撮影しながら、その歴史や文化の研究・解説、花火を題材にした版画の製作、花火大会運営のプロデュースなど、幅広く活動する。